

論文内容の要約

学 生 番 号	3220004	指導 教員 確認	主 査	野崎 真奈美 教授
氏 名	久保田 早苗		副 査	植木 純 教授
			副 査	岩渕 和久 教授

学 位 論 文 名	エイズ治療拠点病院における HIV と共に生きる人々のライフコースに対応した外来看護支援教育プログラムの開発
訳 タ イ ト ル	Development of an Outpatient Nursing Support Education Program for the Life Course of People Living with HIV in AIDS Treatment Base Hospital
共 著 者	なし

論文内容の要約 (1,000 字~1,500 字)

【目的】

長期療養が可能となった HIV と共に生きる人々 (PLWH) のライフコースで遭遇する複雑な医学的・心理社会的問題に対応するための外来看護支援教育プログラムを開発し、その有効性を評価することを目的とした。

【方法】

本研究はインストラクショナルデザインの ADDIE モデルを用いて、教育プログラムの開発および、その有効性を評価した。まず、PubMed、MEDLINE、CINAHL を用いて、国外で有効とされるピアサポーターによる PLWH の心理社会的転帰の改善につながる支援に関する文献検討を行った (研究 1)。次に、エイズ治療拠点病院の PLWH 外来看護支援の現状と教育ニーズを明らかにするため質問紙調査を行った (研究 2)。そして、これらの結果と英国 HIV 協会作成の教育ガイドラインを基盤とし、PLWH 外来看護支援教育プログラムを作成し、PLWH 支援に携わる看護師を対象にプログラム受講前後および、PLWH 支援直後の 3 時点で質問紙調査を行い、プログラムの有用性を検討した (研究 3)。

【結果】

文献検討では、PLWH の心理社会的転帰の改善につながる支援は、カウンセリング、アドヒアランスの障壁の克服等に関する議論や個別介入であった。それらの支援により社会交流が増加し、気分障害によるスティグマの軽減、ピアサポーターの経験に基づく助言で自己効力感が向上、アドヒアランスや自己管理が促進し QOL の向上を認めた。国内のエイズ治療拠点病院の PLWH 外来看護支援の現状と教育ニーズに関する質問紙調査では、64 施設 113 名より回答が得られ (回収率 33.3%)、PLWH 支援経験年数の上昇に伴い、知識、態度、実践、コミュニケーション能力得点は有意な上昇を認めた。また、PLWH 支援経験が 5 年未満の看護師は、PLWH 支援の知識 6 項目、態度 2 項目、実践 32 項目でスキル不足を認めた。PLWH 外来看護支援の教育ニーズとして、「スティグマの概念に関する理解」「自己効力感を高める支援」「セクシュアリティに関するコミュニケーション」に関する得点が低く、これらの理解を深めるためのスキルの習得が必要であることが明らかとなった。文献検討および質問紙調査の結果から、1 項目 10 分程度で構成された 8 項目のプログラムと、HIV 診断直後の場面を想定した 2 動画から構成される Web 教材を開発し、PLWH 支援に携わる看護師 4 名を対象に Web 教材の有効性を検討した。その結果、PLWH 支援のコミュニケーション、知識、実践得点はプログラム受講後に有意に上昇し、PLWH 支援後まで得点上昇し ($p < .01$)、維持されていた。一方、態度は有意な差は認められなかったが、時間の経過とともに得点上昇を認めた。

【考察】

ピアサポーターは、治療や感情を共有できる個人として、健康情報等を伝えるリソースとなり、PLWH の心理社会的転帰の改善につながる事が明らかとなった。PLWH の QOL を高める上で有効とされた支援策を国内の看護支援につなげるためには、国内における PLWH 看護支援のニーズを調査する必要がある。質問紙調査結果から、教育プログラムに必要な学習内容は、英国 HIV 協会作成の教育ガイドラインで示されている内容に、これらの実践能力の向上を目指す内容を加える必要がある。プログラム受講前後の効果測定では、PLWH 支援後までコミュニケーション、知識、実践得点が上昇していた。特に、HIV 診断後に PLWH が抱く負の感情 (死や絶望) に対する困難さの得点が減少しており、Web 教材の受講により PLWH に対する肯定的な理解が深められたと考えられる。Web 教材を受講することで、PLWH が長期療養の中で困難さや悩みが生じやすい段階を理解し、その困難や悩みへの対処方法を習得することが実践能力の向上につながる事が示唆された。

【結論】

作成した PLWH 外来看護支援教育プログラムは、PLWH 支援のコミュニケーション、知識、実践力を向上し、PLWH 支援直後まで維持しており有用であった。

